

楽しむ健康づくり推進事業

相模原市緑区緑保健センター津久井担当

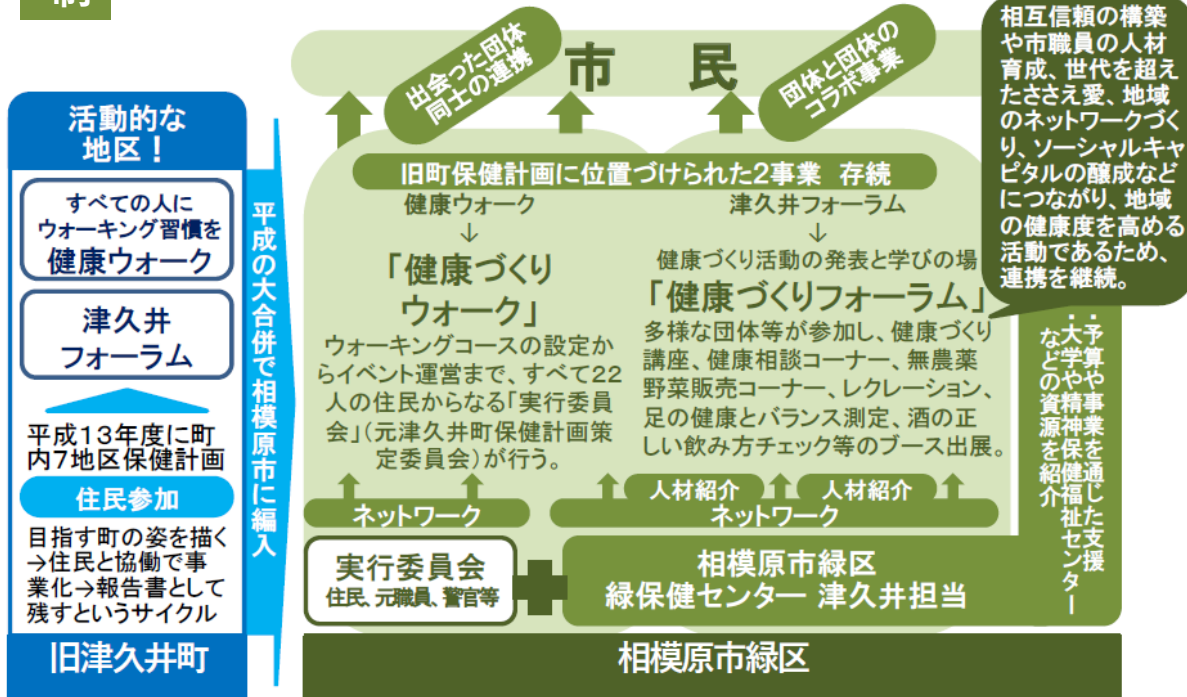
相模原市緑区緑保健センターでは、市町村合併前の旧町の「健康ウォーク」と「健康フォーラム」を、旧町保健計画策定委員会を前身とする実行委員会と二人三脚で継承している。地域に顔が利く実行委員会の力を活かしながら、メンバーの高齢化や時代の変化に即して、事業の実施形態や参加団体を見直し、従来の個人の健康づくりの場から、新たな団体とのつながりづくりや新しい時代の健康づくり発信の場への変容を試みている。

概要・体制

- ・市町村合併後、旧町保健計画策定委員会の住民が熱心に実施し地区内外からの参加も増やしてきた「健康ウォーク」と「健康フォーラム」を継承。住民主体の実行委員会と二人三脚でコース設定、企画、出展団体交渉等の運営を地域資源を紡ぎながら行っている。
- ・保健センターが“行政の顔”を活かして自らのネットワークの中から必要な団体等に企画を依頼するなど、従来の個人の健康づくりから、参加団体同士の連携・互いの情報の共有や新しい時代の健康づくり情報の発信の場に切り替えつつある。

背景・課題

- ・この地区では、市町村合併前から、目指す町の姿を描き、協働で事業化し、報告書として残すというサイクルを重ねており、住民の保健活動が熱心。実行委員会には元役所職員、警察官等もいて、地域に対して非常に顔が利く。
- ・実行委員会の高齢化が課題である。



保健センターの連携機能・役割

- ・合併前旧町事業を参加者も多く、効果も高いことから継承。その後、実行委員会の高齢化、組織としての脆弱性等から、委託ではなく、直営事業に切り替え。しかし、委員会の意見を反映する形は維持。
- ・実行委員会が夜7～9時に開催する定例会にも毎回、保健センター担当保健師が出席。日々の打ち合わせも気軽に来所して行えるよう、オープンな雰囲気をつくっている。
- ・個人の健康づくりの場から、団体同士の連携、新しい時代の健康づくり情報の発信の場とするため、健康経営や未病対策を推進する経済局、協会けんぽ、精神保健センター等に参加を依頼。また、市内の女子大学にボランティア参加を依頼し、若返りと時代に即したプラットフォーム化を模索した。
- ・高齢者の活動が活発であるため、後期高齢者医療広域連合のデータ等で他地区との比較検討をしてみたいと考えている。

効果・成果

- ・住民主体の実行委員会が企画・運営を担い、健康づくり・介護予防に勤しんでいる。
- ・企画した「健康ウォーク」と「健康フォーラム」に多くの参加があり、地域の参加者同士の交流の場であることはもちろん、出展団体同士の情報交換や新たな連携の場となっており、住民と団体と行政の緩やかなネットワークの拡大にも貢献している。
- ・ウォーキング活動が長年継続されているため、歩行時間や運動習慣が減少傾向を示す市全体より、この地区の高齢者では維持されている。前期高齢者の要介護認定率も低い。

ポイント

- 合併前旧町の活動を住民主体の実行委員と二人三脚で継承、●実行委員の高齢化や時代の変化に合わせて事業形態や連携団体などを見直し、地域団体同士のつながりづくりの場に変容させている、●保健活動が浸透し、前期高齢者の要介護認定率が低い

楽しむ健康づくり推進事業

相模原市緑区緑保健センター津久井担当(連携体制構築に向けたプロセス)



位置についてヨーイ

- ・本事業の柱である「健康ウォーク」と「健康フォーラム」は、合併前の旧津久井町の保健計画に位置づけられた事業で、合併後も活発であった同町の保健活動の基盤を担保するもの。緑保健センターには、「津久井担当」という係も置かれている。
- ・目指す町の姿を描き、協働で事業化し、報告書として残すというサイクルを重ねており、住民が熱心である。



根拠を集める

- ・旧町当時の活動の経過を聞くとともに、合併後の引き継ぎ資料等を確認するなどし、住民活動の経過を確認した。



育てる、促す

- ・2つの事業は当初、実行委員会に委託していた。しかし、委員の高齢化、委託団体としての脆弱性を考慮し、平成26年度から「楽しむ健康づくり推進事業」として一本化。地区内外からの参加者も多いことから、実行委員会の意見を活かしながら保健センター直営事業として継続されている。
- ・「健康フォーラム」には、実行委員会のつながりで出展する無農薬野菜の販売コーナー等のほか、健康づくり推進員や食生活改善推進員、協会けんぽ神奈川支部、レクレーション協会、県経済局、精神保健センター、大学等が参加し、声掛けした小中学生が受付を務めるなどしているが、保健センターが“行政の顔”を活かして参加をとりつけた組織も少なくない。その理由は、参加者が多い上、団体間の新たな連携など地域の利点があるため。



風をつかむ

- ・平成18年度の合併時に同事業の存続が危ぶまれたが、強い声に応え、保健センターでは、別の事業・予算で継承し、担当係を置くことにした。
- ・担当者も、住民活動に寄り添いながら、保健活動のプロセスを学んでいる。



仲間をつくる

- ・「健康ウォーク」と「健康フォーラム」の実行委員会22人は旧町保健計画策定委員であり、活動の経緯とともに、今後の意向を確認。



協議組織をつくる

- ・平成18年度の合併時に市の「市民健康づくり運動指導事業」の「楽しむ健康づくり推進事業」に位置づけ、実行委員会に委託し、二人三脚で推進してきた。



評価・フィードバックする

- ・地域に顔が利く実行委員会が運営する「フォーラム」は、各団体等が持つ情報を共有できる場として機能するとともに、参加団体同士の連携も生み出し、そのネットワークの拡大にも寄与している。
- ・長年、ウォーキングが行われてきたため、全市で歩行時間、運動習慣が減っている一方で、この地区の高齢者層では、いずれも高く維持されている。
- ・全市の前期高齢者の要介護認定率が4.7%であるのに対し、4.2%と若干低い。



B 人材育成の意識

人材育成の意識

- ・団体同士の連携づくりと、社会参加や多世代交流など時代に即した健康づくり発信のため、若い世代の参画を意識している。
- ・保健センターとしては、住民との二人三脚の保健活動の現任教育の場としても機能させている。